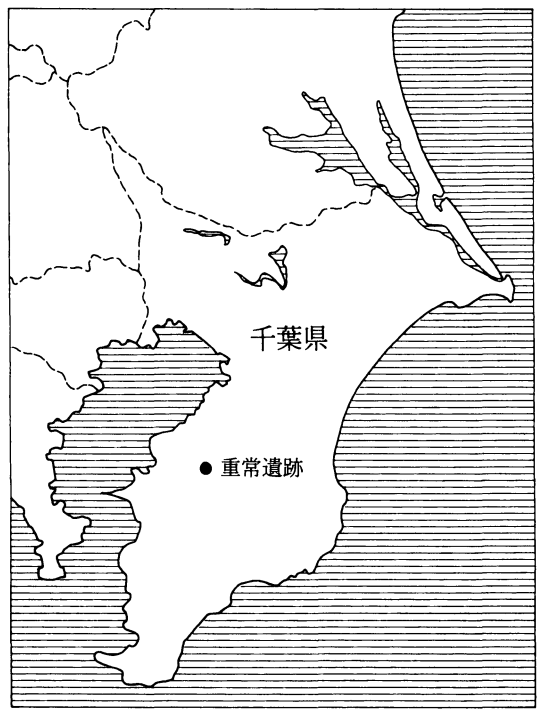
袖ケ浦市重常遺跡

— 県単道路改良(一般)君津平川線埋蔵文化財調査報告書 —



平成11年3月

千　葉　県　土　木　部

財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第367集として、千葉県の県単道路改良（一般）君津平川線建設事業に伴って実施した袖ケ浦市重常遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の土師器や中世の陶磁器が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また教育資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年３月31日

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　中　村　好　成

本文目次

I　はじめに……1
　1　調査の経緯と経過……1
　2　遺跡の位置と歴史的環境……1
II　検出した遺構と遺物……4
　1　調査区の概要……4
　2　基本層序……6
　3　遺構……8
　4　遺物……9
III　まとめ……9

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡……2
第2図　周辺地形図（1）……3
第3図　土地条件図……4
第4図　周辺地形図（2）……5
第5図　土層柱状図……5
第6図　遺構配置図（1）……6
第7図　遺構配置図（2）……7
第8図　1号・2号土坑平面・断面図……8
第9図　出土遺物……9

図版目次

図版1　1・2．調査前風景　3・4．1トレンチ
　　5．2トレンチ　6．3トレンチ
　　7・8．5トレンチ
図版2　1・2．6トレンチ　3．10トレンチ
　　4．1号土坑　5．2号土坑
　　6．調査風景　7．出土遺物

凡　例

1　本書は、千葉県による県単道路改良（一般）君津平川線建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県袖ケ浦市打越字重常10ほかに所在する重常（しげつね）遺跡（遺跡コード229-018）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査は、調査研究部長西山太郎、市原調査事務所長森尚登の指導のもと、技師半澤幹雄が平成8年2月1日から平成8年2月29日の期間に実施した。

5　整理作業は、調査部長沼澤豊、南部調査事務所長高田博の指導のもと、主任技師糸原清が平成10年11月1日から平成10年11月15日の期間に実施した。

6　本書の執筆は、主任技師糸原清が行った。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、袖ケ浦市教育委員会の御指導、御協力を得た。

8　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図　国土地理院発行　1／25,000地形図「上総横田」(NI-54-19-16-4)、「木更津」(NI-54-25-4-2)

第2図　(財)日本地図センター発行　迅速測図原図復刻版「千葉県上総国望陀郡横田郷望陀郷」「千葉県上総国望陀郡真里村及野里村」

第4図　袖ケ浦市役所発行　1／2,500都市計画図「袖ケ浦市地形図NO41」(IX-ME34-1)

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

Ⅰ　はじめに

1　調査の経緯と経過

千葉県土木部は当地域の道路網整備を目的に、県単道路改良（一般）君津平川線事業を計画した。事業地区の埋蔵文化財の取扱いについて関係機関が協議した結果、記録保存の措置を講じることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成８年２月１日から２月28日まで行った。重常遺跡の対象面積1,000㎡について、上層確認調査114㎡を実施した。その結果、調査区の大半で近世の耕作が基盤層まで及ぶことが明らかとなり、基盤層上で発見された遺構の調査を行い、発掘作業を終了した。

2　遺跡の位置と歴史的環境

重常遺跡は袖ケ浦市打越字重常に所在する。小櫃川中流域左岸に位置し、東京湾から約7.5㎞遡った地点にある。調査区は小櫃川と標高47ｍほどの台地に挟まれた幅200ｍほどの狭い低地上で、地形的には小櫃川の氾濫平野と下位河岸段丘面の境界付近に相当する。

周辺の旧石器時代の発掘調査例としては林遺跡[1]の立川ローム層第Ⅵ層中から検出されたブロックがある。林遺跡は小櫃川と支流鎗水川の分水界に位置する遺跡である。このほかに鎗水川下流の滝ノ口向台遺跡[2]で立川ローム層第Ⅶb層中のブロックが発見されているが、周辺の旧石器時代の発掘調査例は比較的乏しい。

縄文時代では、早期には鎗水川に注ぐ谷津に囲まれた大竹遺跡群[3]で、大規模な礫群や住居跡、炉穴、陥し穴が発見されている。鎗水川と矢那川水系との分水界の石仏遺跡[4]でも住居跡が発見されている。前期は大竹遺跡群で、中期は滝ノ口向台遺跡や鎗水川中流域の嘉登遺跡[5]で、後期は嘉登遺跡や大竹遺跡群、石仏遺跡で集落跡が発見され、周辺各地で縄文時代の遺跡が発見されている。

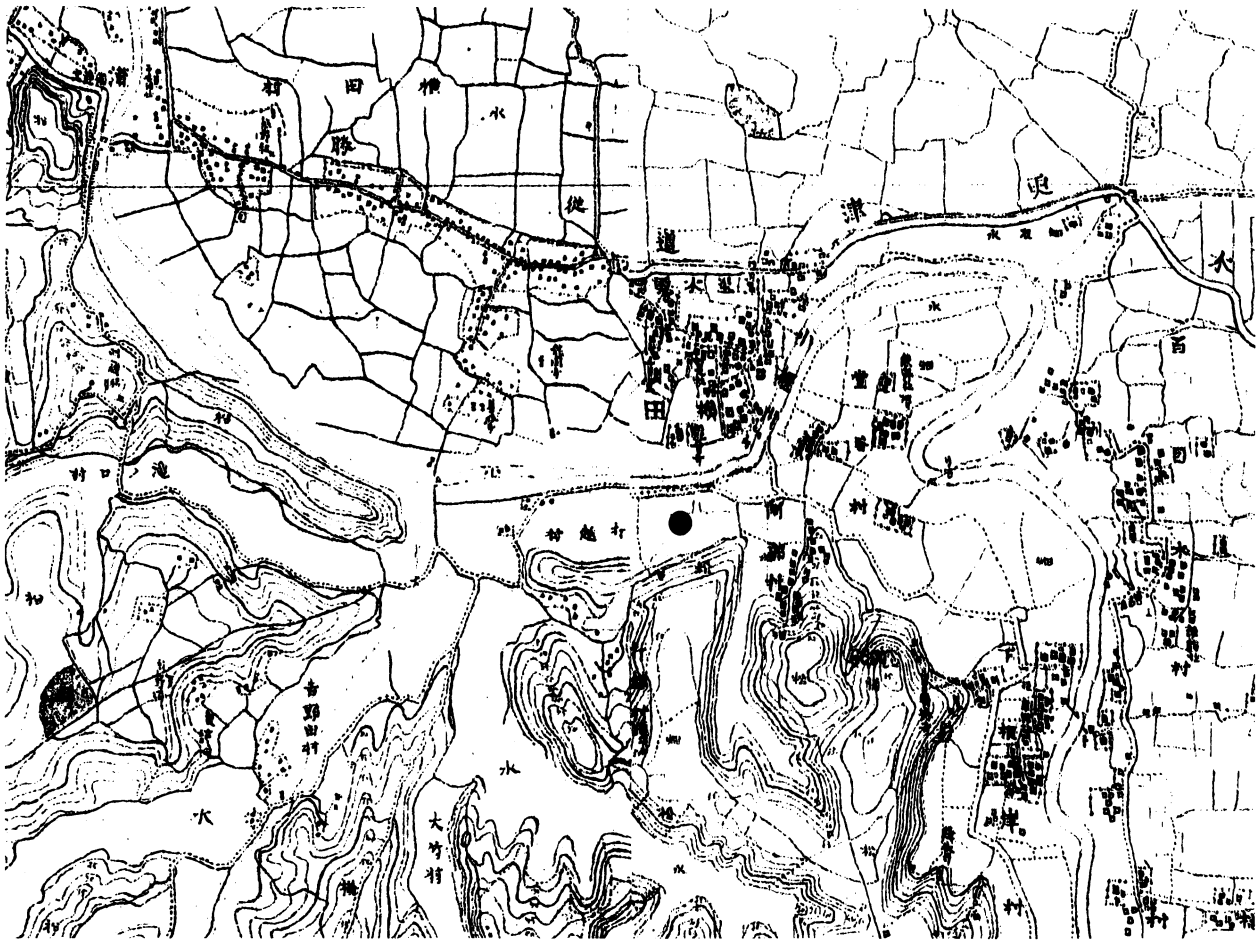
弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、大竹遺跡群で大規模な集落や方形周溝墓群・古墳群が発見されている。特に向神納里遺跡の須和田期の方形周溝墓と、笊田遺跡の須和田期の集落跡の発見は注目される。また滝ノ口向台遺跡でも宮ノ台期の集落跡と方形周溝墓が発見されている。小櫃川中流左岸に面した周辺の台地上でも、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が大規模に展開している可能性が高い。このほか、大竹遺跡群の三ツ田台遺跡で古墳時代前期から後期の集落跡が、石仏遺跡で古墳時代前期から中期の集落跡も発見されている。なお、小櫃川の自然堤防上の芝野遺跡[6]や菅生遺跡では、弥生時代後期から続く水田跡も発見されている。一方、古墳群についても周辺地域は小櫃川流域の中で比較的密に分布し、前方後円墳や前方後方墳を１基～２基含む古墳群が多い[7]。その中には出現期古墳や50ｍ級前方後方墳を含む滝ノ口向台古墳群や、40ｍ級～50ｍ級の前方後円墳を含む平ケ作古墳群や北上原古墳群[8]などがある。

奈良・平安時代の遺跡としては、方形周溝状遺構と石櫃・火葬墓が三ツ田台遺跡、嘉登遺跡、石仏遺跡及び林遺跡で発見されている。また、笊田遺跡で墨書「千万」のある骨蔵器、平ケ作古墳群[9]で骨蔵器転用の緑釉手付瓶も発見されている。集落については小櫃川の河岸段丘上の山王台遺跡[10]で発見されている。今後の低地の発掘調査の増加により、周辺地域の中核集落の存在が明らかになる可能性が高い。なお、山王台遺跡が位置する大字「下郡」は畔蒜郡家推定地の一つである。

中世には畦蒜荘に属し、応永18年９月20日付け畦蒜荘横田郷検田帳案と同23年９月２日付け畦蒜荘横田郷検田帳により、荘内の横田郷の存在が知られる[11]。調査区が接する大字阿部の地名も応永18年の検田帳に見られることから、調査区も畦蒜荘横田郷に含まれる可能性が高い。畦蒜荘の存在は永正７年（1510年）

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

1	重常遺跡	7	打越砦跡	13	石仏遺跡	19	横田郷中心地点
2	芝野遺跡	8	打越台遺跡	14	上宮田城山城跡	A	椿古墳群
3	北口城跡	9	大竹砦跡	15	林遺跡	B	滝ノ口向台古墳群
4	小坪館跡	10	笊田遺跡	16	上根岸館跡	C	平ケ作古墳群
5	笹子城跡	11	三ツ田台遺跡	17	山王台遺跡	D	北上原古墳群
6	滝ノ口向台遺跡	12	嘉登遺跡	18	根岸根遺跡	E	向神納里遺跡



第２図　周辺地形図（１)(1/20,000)　　● 重常遺跡

まで確認できるが、戦国期は真里谷城に本拠を置く上総武田氏（真里谷氏）の実質的な支配下に置かれたと考えられる。周辺には真里谷氏支城の笹子城跡[12)]や中尾城跡や、家臣大竹信満の大竹砦跡、家臣大弊美作守の北口城跡、家臣武田信恒の小坪館跡など一族・被官の伝承が残る城跡等が多く分布する[13)]。調査区南に接する打越砦跡[14)]にも阿部重常の砦の伝承が残されている。調査区周辺は近世は直轄領と旗本領の打越村と阿部村に、明治22年以降は富岡村、平川町、袖ケ浦町を経て、現在袖ケ浦市の大字に至っている。

注１　㈶君津郡市文化財センター　1987『林遺跡』

㈶君津郡市文化財センター　1994『林遺跡II』

2　㈶千葉県文化財センター　1993『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』

3　㈶君津郡市文化財センター　1991『笊田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)－大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書－』

㈶君津郡市文化財センター　1993『大竹遺跡群発掘調査報告書II－二又堀遺跡・大竹古墳群－』

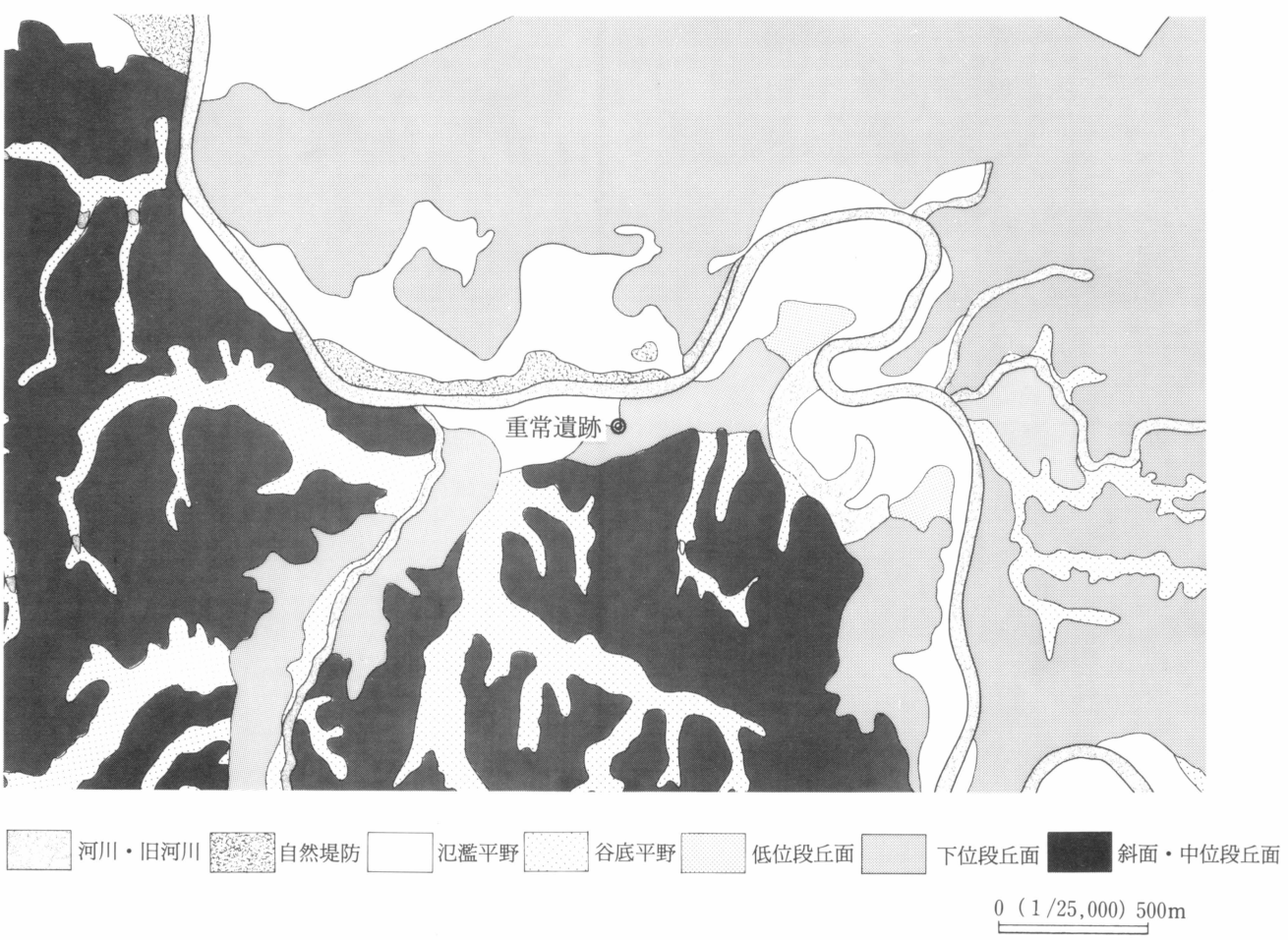
㈶君津郡市文化財センター　1994『大竹遺跡群発掘調査報告書III－尾畑台遺跡・内出原遺跡・大竹古墳群・下根岸古墳群－』

4　㈶君津郡市文化財センター　1991「石仏遺跡」『君津郡市文化財センター年報Ｎｏ．９』

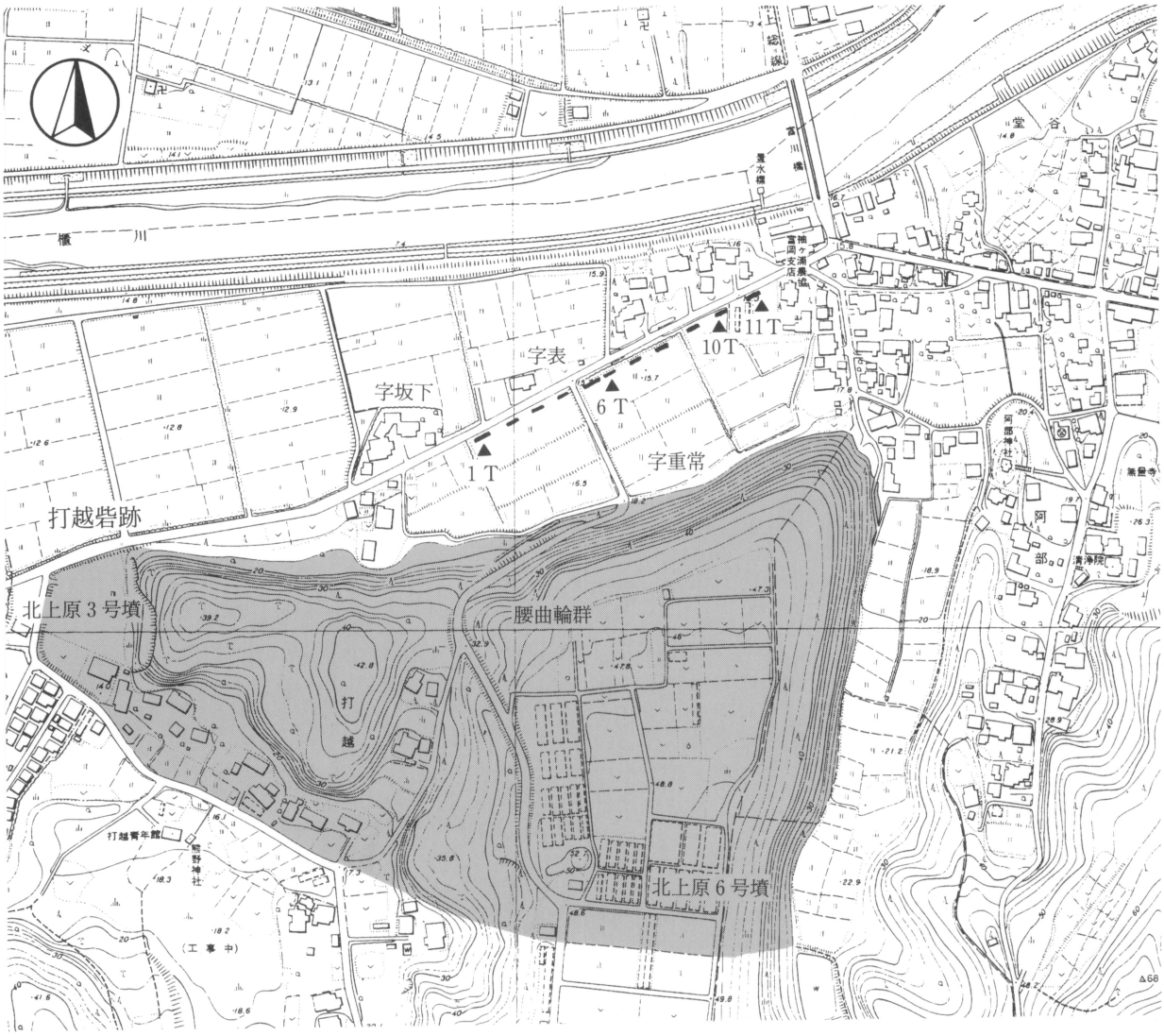
5　㈶君津郡市文化財センター　1994『嘉登遺跡・大竹長作古墳群』

6　神野信他　1992「木更津市芝野遺跡における水田跡について」『研究連絡誌』第34号　財団法人千葉県文化財センター

7　千葉県教育庁文化課　1990『千葉県所在古墳群詳細分布調査報告書』　千葉県文化財保護協会
8　袖ケ浦町教育委員会　1984『打越北上原古墳群第３号墳』
9　戸倉茂行　1991「袖ケ浦町打越出土の緑釉手付瓶」『宇麻具田』第４号　木更津古代の会
10　㈶君津郡市文化財センター　1989「山王台遺跡」『君津郡市文化財センター年報Ｎｏ．７』
㈶君津郡市文化財センター　1997「山王台遺跡」『君津郡市文化財センター年報Ｎｏ．14』
11　柴田龍司　1993「小櫃川流域における中世遺跡の変遷（中世後期の様相）」『研究連絡誌』第37号　財団法人千葉県文化財センター
笹生衛　1998「村の生活（上総国畦蒜荘横田郷を舞台に）」『千葉県の歴史資料編中世１考古資料』　財団法人千葉県史料財団
12　柴田龍司　1993「笹子城の概要」『研究連絡誌』第37号　財団法人千葉県文化財センター
13　千葉県教育庁文化課　1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告Ⅱ－旧上総・安房国地域－』
14　柴田龍司他　1997『袖ケ浦の中世城館跡』袖ケ浦市史基礎資料調査報告書７　袖ケ浦市教育委員会

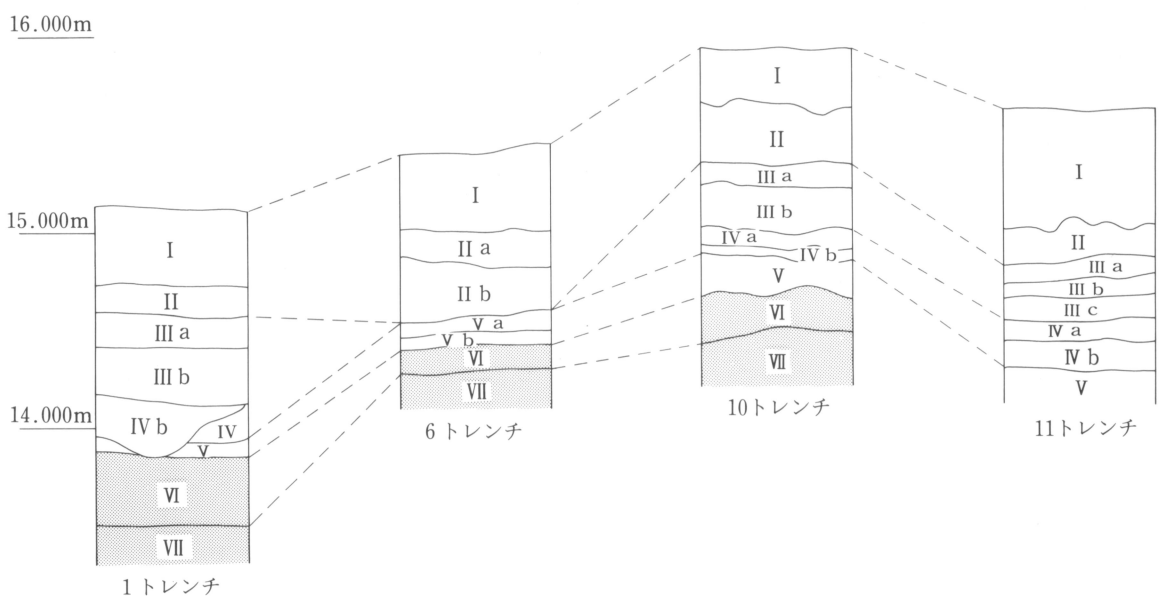


第３図　土地条件図



第4図　周辺地形図（2）

0　(1/5,000)　200m



第5図　土層柱状図

II　検出した遺構と遺物

1　調査区の概要

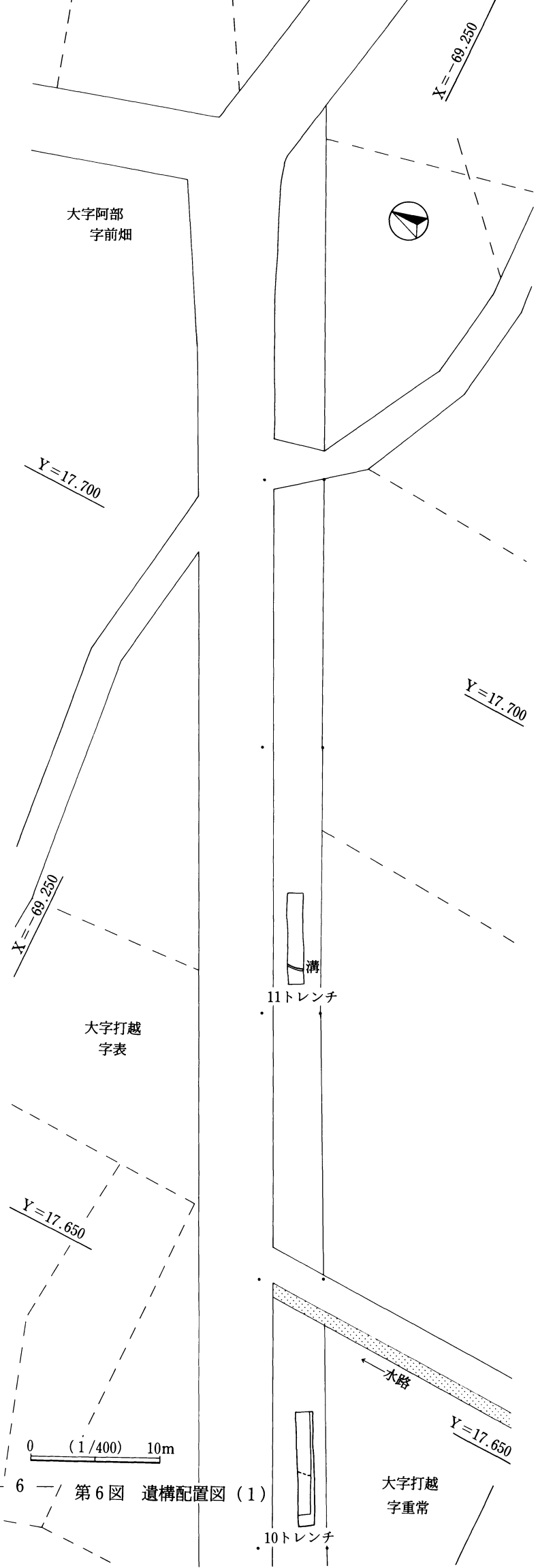
事業地は東西約3.0km、幅約10mである。事業地内の道路と水路を避けて、幅２m、長さ８m・18mのトレンチを11本ほぼ一列に設定した。そして各トレンチ内に幅50cmの排水溝と２m×２mの排水桝を設け、確認調査を実施した。一段深く掘削した排水溝と排水桝で土層を観察し、掘削と遺物の取上げ、遺構の確認に努めた。その結果、現在の水田耕作土の下から近代、近世の水田耕作土層と、古代以降の基盤層が発見された。最終的には基盤層上で土坑２基と疑似畦畔南北７条・東西５条、溝南北４条・東西１条が確認された。

2　基本層序

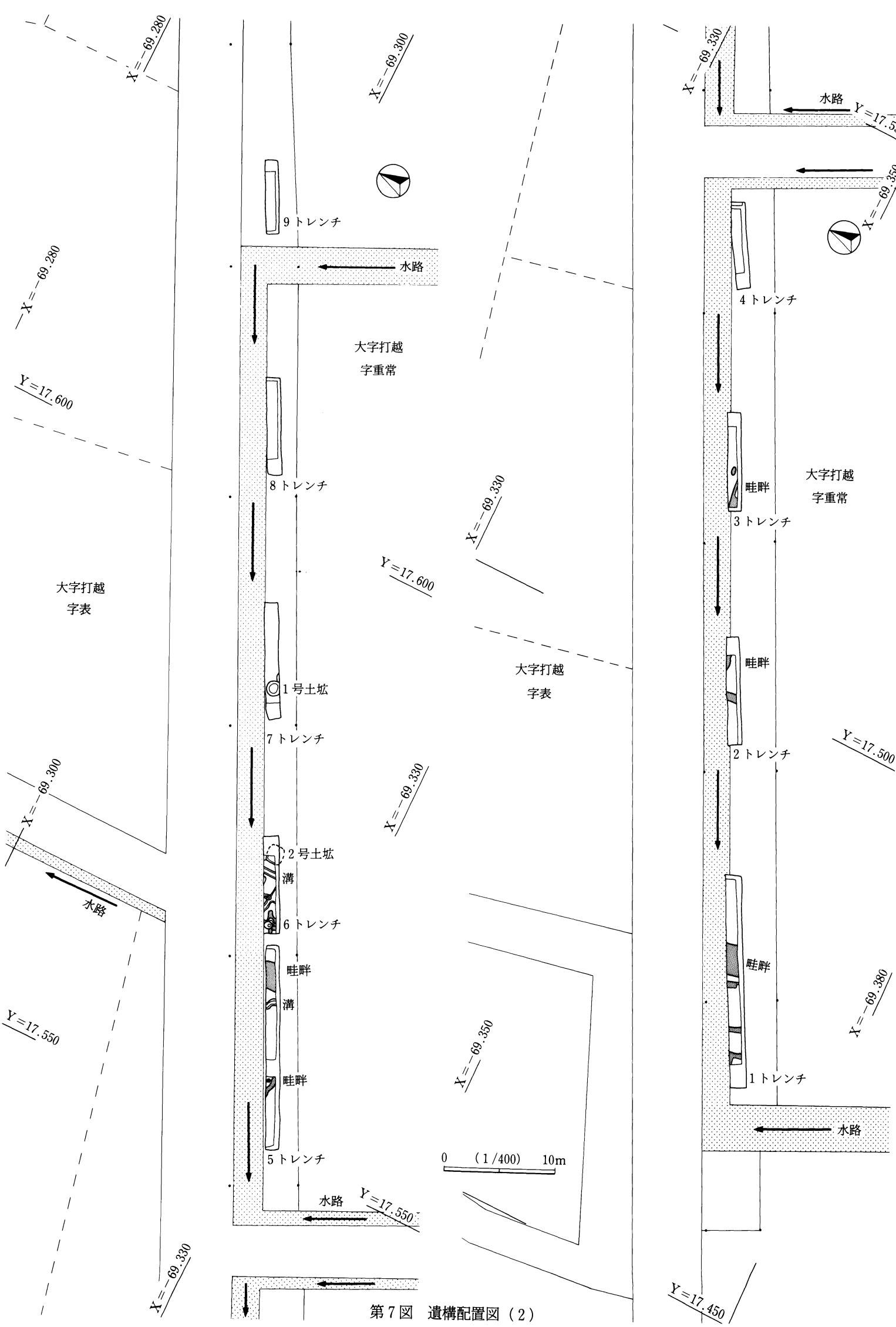
調査区内の高低差は約１mほどである。調査前の状況は東側の一部が畑地で、大半は水田であった。調査区周辺は昭和43年に南平川土地改良区が設立され、土地改良が実施されている。各トレンチでⅠ層からⅦ層の基本土層が確認された。Ⅴ層からⅦ層はほぼ安定した土層で、これらの土層を鍵に層位が同定された。上層のⅠ層からⅣ層は、地形の高低や水田耕作の差、後世の客土の差により、トレンチにより多少の違いが認められた。

Ⅰ～Ⅱ層は表土層である。Ⅲ層～Ⅴ層は水田耕作土である。Ⅲ層は青灰色粘質土で、Ⅲaは山砂、Ⅲbは灰色粘土、Ⅲcは青灰色粘土を含む。Ⅳ層は黒灰色～灰褐色粘質土で、赤色斑、淡青灰色粘質土を含む。Ⅳaは耕作痕が見られる範囲である。Ⅴ層は白黄色～淡灰色粘質土で、橙色斑を含む。Ⅴbはグライ化した土層である。Ⅵ層、Ⅶ層は泥炭層である。Ⅵ層は黒灰色粘質土で、植物遺体を多く含む。Ⅶ層は茶褐色～灰褐色粘質土で植物遺体を主体としている。

Ⅵ層とⅦ層からは遺物が発見できず、古代以



第６図　遺構配置図（１）


X=−69.280
X=−69.300
X=−69.330
X=−69.350
X=−69.380
Y=17.600
Y=17.550
Y=17.500
Y=17.450
水路
9トレンチ
8トレンチ
7トレンチ
6トレンチ
5トレンチ
4トレンチ
3トレンチ
2トレンチ
1トレンチ
1号土坑
2号土坑
溝
畦畔
大字打越
字重常
大字打越
字表
0 (1/400) 10m

第7図　遺構配置図（2）

降の基盤層と位置付けられた。Ⅳ層とⅤ層からは古代から中世を中心とする遺物が発見された。そして、1・2号土坑との関係から、Ⅴ層は少なくとも近世に遡る水田耕作土層の可能性が高い。

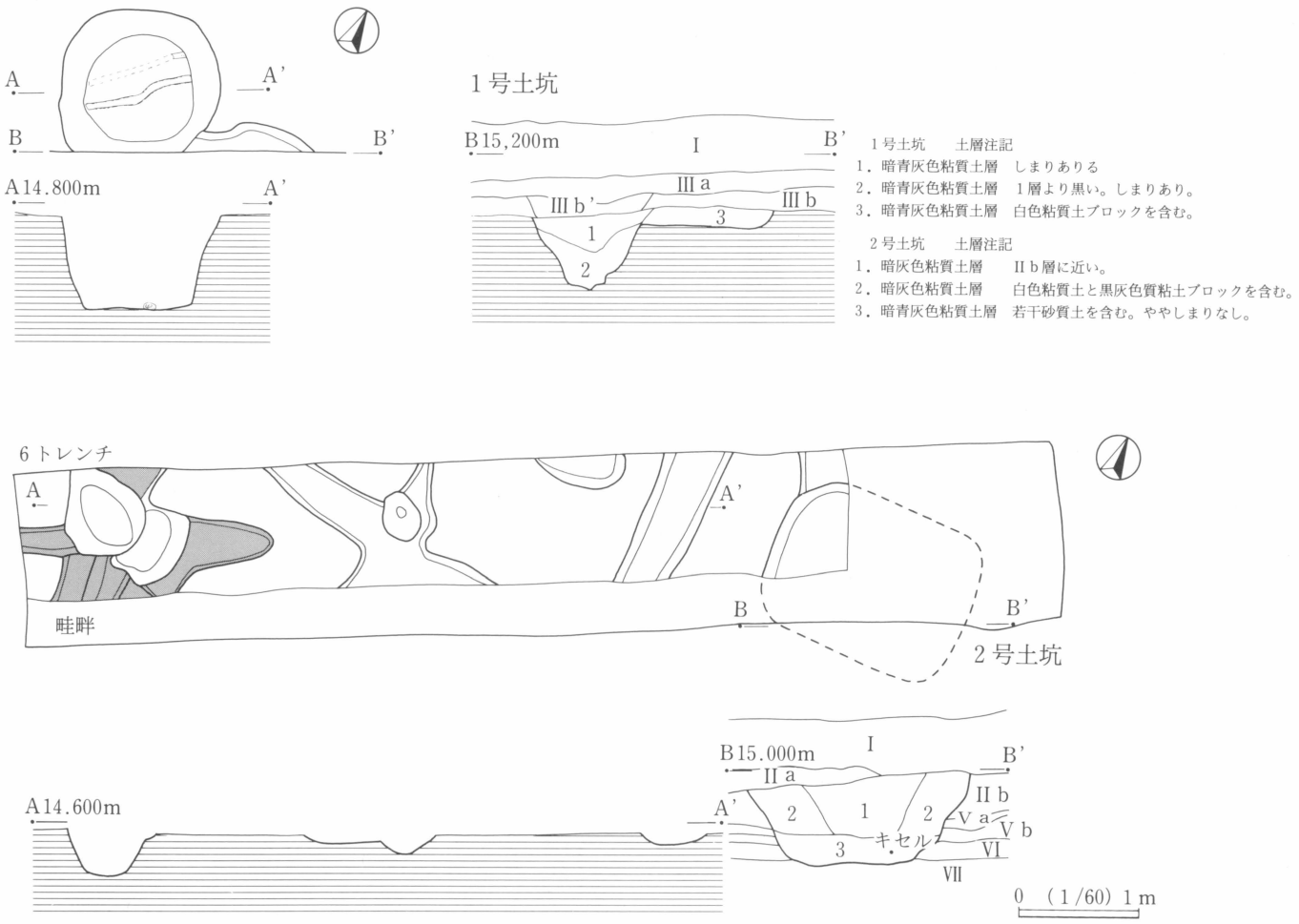
3　遺構

1号土坑（7トレンチ）

直径1.28m，深さ0.75m、底面はほぼ平らである。底面はほぼ円形で、確認面でやや楕円形を呈する。Ⅴ層を掘り込んでいる。覆土は暗青灰色粘質土を主体とし、全体にしまっている。底面中央から長さ90cm，幅6cmほどの丸太状木材が発見された。底面いっぱいに敷かれた状態で発見されたことから、土坑に伴う可能性が高い。覆土中からは土師質土器片37点、須恵質土器片1点、青磁片1点、白磁片1点が出土した。いずれも小破片で図示できるものはないが、近世以降の包含層中の土器量に比べ、比較的まとまった出土量である。土師質土器は古墳時代から古代の所産で、青磁片と白磁片は中世の所産である。近世以降の遺物は含まれていない。

2号土坑（6トレンチ）

6トレンチの北西隅から一部発見された。一辺0.9m～1.1mほどの隅丸方形と推測される。深さは40cmで、底面はほぼ平坦である。Ⅱ層の下部から掘り込まれている。覆土下層は砂質土を含み、しまりがやや弱い。覆土中からは土器片は出土せず、覆土下層からキセルの吸口1点（第9図7）が出土した。長さ6.0cm、小口外径0.9cm・内径0.8cm、吸口外径0.4cm・内径0.3cmである。遺物及び掘込み開始面から、近世後

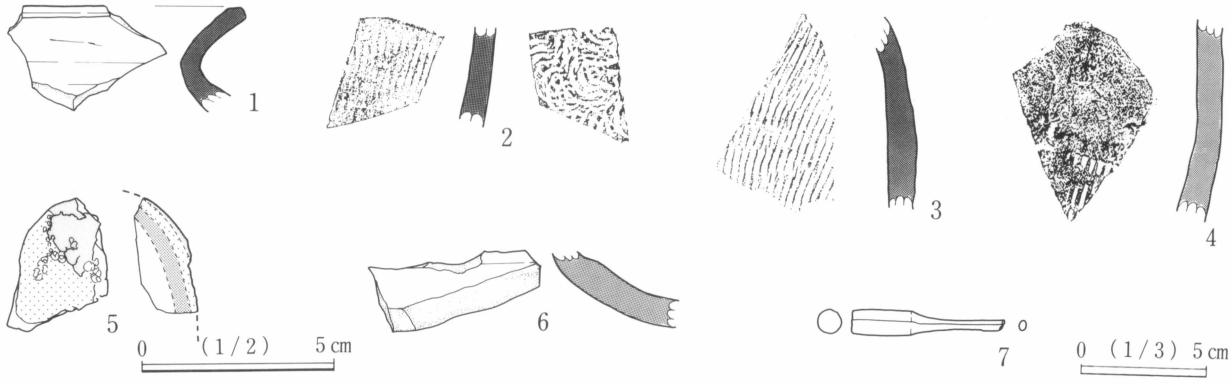


第8図　1号・2号土坑平面・断面図

半から近代前半の土坑と推測される。

4　遺物

出土量はわずかであるが、ほぼ全域のトレンチから出土した。1トレンチのⅢb層から常滑甕片1点、Ⅳb層から染付け碗片1点と土師質土器片3点、畦畔覆土中から常滑甕片1点（第9図6）が出土した。6は外面に緑色自然釉が付着している。2トレンチの畦畔覆土中から土師器片1点が出土した。3トレンチからは常滑甕片1点（第9図4）が出土した。4は外面に平行叩きが認められる。5トレンチからは須恵器甕片1点（第9図2）、土師器片22点、土錘片1点、近代陶器片1点が出土した。2は外面に平行叩きが、内面に同心円文の当て具痕跡が認められる。土師器片の中には、非ロクロ成形やロクロ成形の底部回転ヘラケズリの坏片が含まれる。9トレンチからは須恵器甕片1点（第9図1）、羽口片1点（第9図5）、鉄滓1点（図版2の7）が出土した。11トレンチからは土師器片5点が出土した。この中にはロクロ土師器坏の細片が含まれる。



第9図　出土遺物

Ⅲ　ま　と　め

遺構としては土坑2基と疑似畦畔12条、溝5条が検出された。疑似畦畔と溝については現在の水田地割の方向とほぼ同一である。疑似畦畔南北7条のうち5条は現在の水田地割の境界とも近似する。溝は特に5・6トレンチで集中して発見された。この地点の北側では南北方向の用水路が存在しており、これに先行する遺構群と想定される。このように川と台地に挟まれた狭いこの地点では、基本的な水田地割の変更を確認することができなかった。一方で5・6トレンチで集中して検出された多数の疑似畦畔と溝の存在は、長期間営まれた水田耕作の歴史を窺わせるものである。また、近世遺物が出土した2号土坑も、水田地割の境界付近で検出されており、水田遺構に伴う可能性がある。

このように遺構としては近世以降の水田関連遺構が大半であったが、1号土坑は中世に遡る可能性がある。また、遺物としては古墳時代から中世のものが比較的多く発見された。近世遺物の出土が2、3点にとどまったのとは対照的である。いずれも小破片であるが、遺物の様相は周辺の河岸段丘上で集落跡が発見された山王台遺跡や根岸根遺跡のあり方と類似している。調査区自体は、中世以前も居住地としては不適な立地と想定されるが、隣接する調査区東側と南側のやや広い河岸段丘面には、古墳時代から中世の集落跡の存在が推測される。今回の発掘では、中世の横田郷阿部や打越砦跡との関わりを積極的に示す遺構は発見できなかったものの、小櫃川中流左岸の河岸段丘上の遺跡のあり方を明らかにする上で、一定の成果を挙げたと評価できる。

1．調査前風景（11T付近から西をのぞむ）

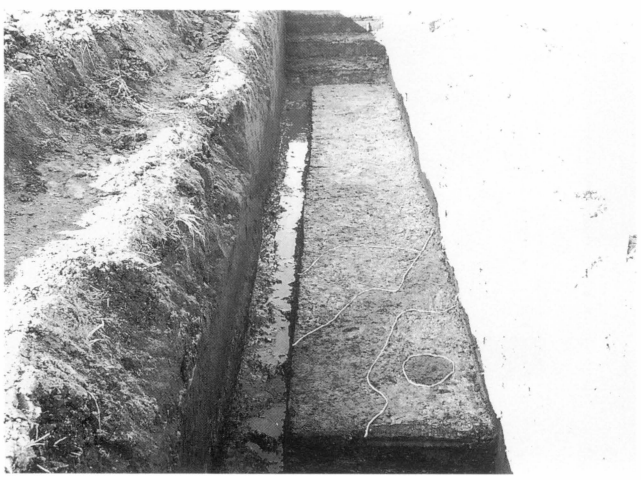
2．調査前風景（1Tから東をのぞむ）

3．1トレンチ

4．1トレンチ土層断面

5．2トレンチ

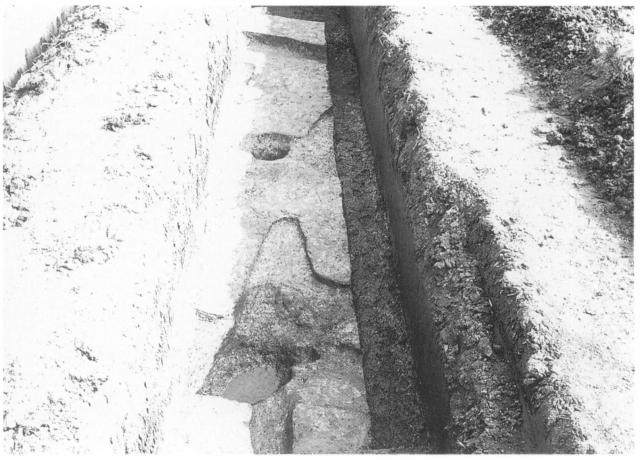
6．3トレンチ



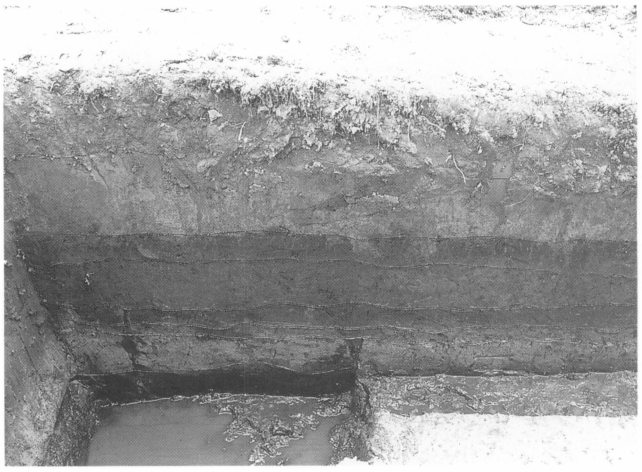
7．5トレンチ西側

8．5トレンチ

1．6トレンチ



2．6トレンチ

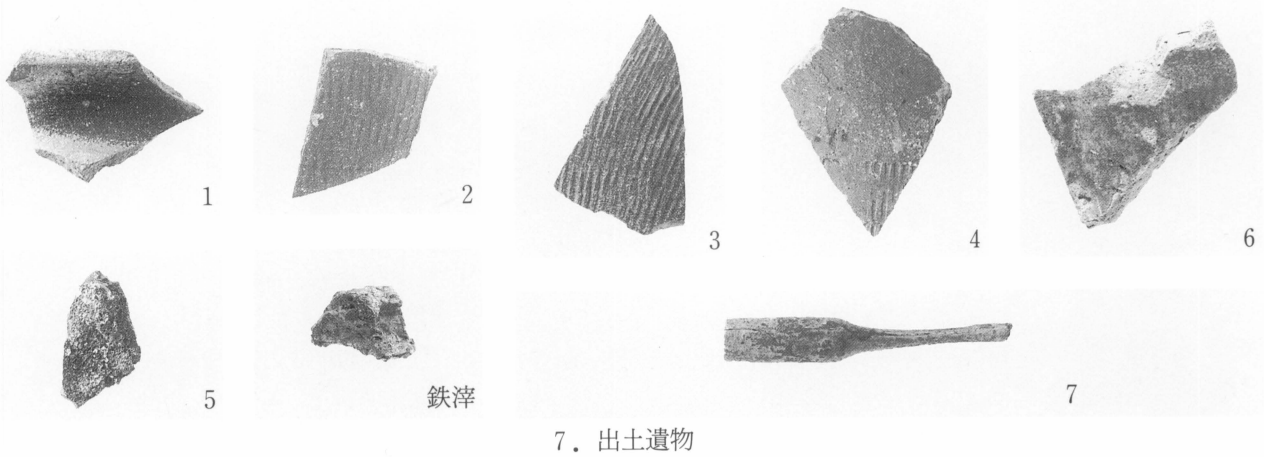


3．10トレンチ土層断面

4．1号土坑

5．2号土坑

6．調査風景（4トレンチ）



7．出土遺物

報告書抄録

ふりがな	そでがうらししげつねいせき
書名	袖ケ浦市重常遺跡
副書名	県単道路改良（一般）君津平川線埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第367集
編著者名	糸原　清
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　　Tel　043-422-8811
発行年月日	西暦　1999年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
重常（しげつね）	千葉県（ちばけん） 袖ケ浦市打越（そでがうらしうちこし） 字重常（あざしげつね）１０ほか	229	018	35度 22分 30秒	140度 01分 40秒	19960201～ 19960229	1,000㎡	県単道路改良（一般）君津平川線建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
重常	集落跡	古墳時代・古代 中世		土師器・須恵器・陶磁器・羽口・鉄滓	中世荘園「横田郷阿部」と戦国期打越砦跡の隣接地の発掘調査である。
	生産遺跡	近世	土坑　2基 水田跡　1面 溝　5条	陶磁器・キセル	

千葉県文化財センター調査報告第367集

袖ケ浦市重常遺跡

－県単道路改良(一般)君津平川線埋蔵文化財調査報告書－

平成11年3月31日発行

編集　財団法人　千葉県文化財センター

発行　千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1
財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印刷　株式会社　弘文社
市川市市川南2-7-2